

■ 白の階調2017 -レリーフと版による表現-

■ White Gradation 2017 -Relief and Print-

趙慶姫

CHO Kyong Hee

青山学院女子短期大学 現代教養学科

Department of Contemporary Liberal Arts, Aoyama Gakuin Women's Junior College

光、陰影、調子

light, shade, tone

レリーフ「白の階調」シリーズは、光の存在の意識化をテーマとする、光がつくり出す柔らかく微妙な陰影による造形表現である。2006年から紙のエンボス加工、石膏の流し込み成形など、素材と加工方法の研究に取り組み、2014年からは木製パネルのベースに木材、MDFで造形し、ジェツソを塗装するという方法で制作を行っている。一方、並行する版画制作では、黒やグレーの階調による微妙な調子を生かし、陰影や透明感を感じさせ、やはり光を意識する表現に取り組んでいる。

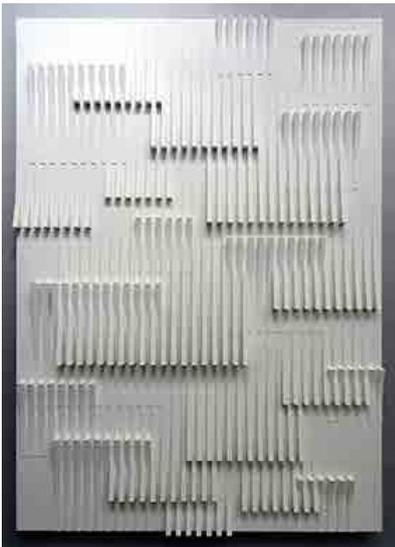
2013年から、この二つの異なる表現方法を用いて、立体と平面という異なる次元を視角的に行き来する試みを行っており、2016年の第17回大会作品発表では、同じ構図のレリーフ(写真1)と版画(写真2)を対比させる展示を行い、その研究に至る経緯を概要として述べた。

この2作品の場合は、レリーフの制作が先である。素材の加工方法の可能性を研究する中で、木の薄板のしなにより、ベースのパネル面から立体が立ち上がる形状を作ることを考え、それ

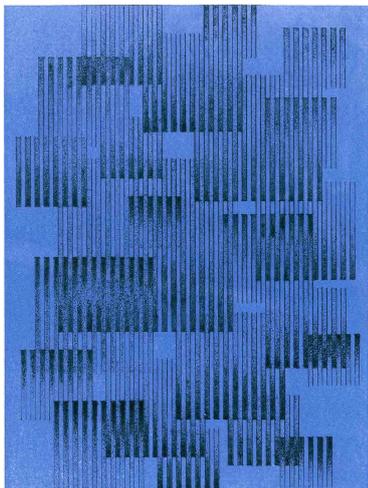
を交差することで、陰影の反復・反転を生じさせている。その構図を版画に置き換える際、ドライポイント技法を用いて、レリーフの凸部に当たる部分を暗い調子にして、明暗を反転させている。またメゾチントの技法を用いて、この部分を明るく浮き上がるようにする表現も可能であり、版画では二次元表現の自由度を生かし、技法を変えた表現のバリエーションも試みている。

このたびの研究では2016年の作品とは逆に、先に制作した版画(写真3)をレリーフに置き換える。このエッチングによる版画作品は当初、線の疎密だけで調子をつけようとしたが、腐蝕された凹部に点描を加えることで明暗の変化を強めた。レリーフの方は本稿を書いている時点でまだ出来上がっていない。二次元から三次元へ、平面のイメージから立ち上がり、微かな奥行きの変化によって陰影が生まれるプロセスが、レリーフ表現の面白さである。

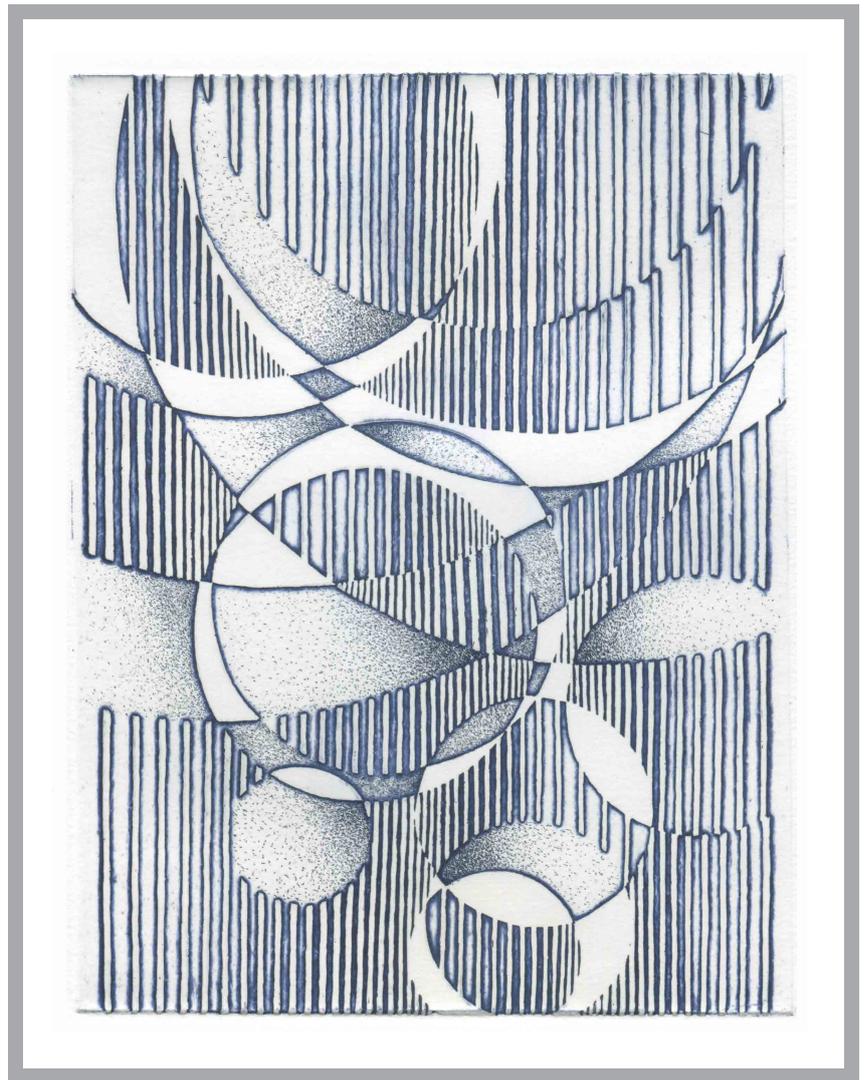
同じ構図であっても、それぞれの表現方法による光の捉え方が異なる。その対比によって視覚表現の可能性を探っている。



(写真1) レリーフ: 130Hx73Wx4Dcm/木



(写真2) 版画: 16Hx12Wcm/ドライポイント



(写真3) 版画: 19.7Hx14.8Wcm/エッチング